

# MSUの教職大学院での専門職ポートフォリオの分析 - MACTコースのケーススタディ -

寺西和子

(学校教育講座 教育学)

## Professional Portfolio in Graduate School of Michigan State University -Case Study on Master of Arts in Curriculum and Teaching-

Kazuko TERANISHI

*Department of School Education (Education), Aichi University of Education*

### 1. はじめに

近年、学校教育で、子どもの学びに関する様々な資料を学習ファイルに閉じて、成長の確かな足跡を残そうとするポートフォリオづくりが広くとり入れられ、ポートフォリオ評価の実践が広まりつつある。それは、総合的学習ばかりでなく教科学習にも広がりを見せ、個々の学習者の学びの道筋や足跡を残す手だてや道具としてその有効性が認められてきている。

ポートフォリオは本来、その子全体の成長、つまり、学習者の成長や発達について継続的・時系列的な成長が見て取れるように作成されるものである。

学習ファイルやフォルダーに自分の学びに関するワークシートや学習カードや作品や諸資料を綴じて作成するポートフォリオは、自らの学びをふり返る時には、データとなって有効に活用できることから、その実践は高く評価されてきている。

こうしたポートフォリオづくりによって、学習者、学び手の学びの筋道、足跡の過程が見て取ることが可能になり、自らの学びを「ふり返り」、「自省」(reflection)や「自己評価」(self-assessment)の手段として有効に働かせて活用する可能性は大きいものがあると言える。というのも、ポートフォリオを活用してふり返ることは、学習者のメタ認知を育て、自己認識を深めることを助ける手助けになると考えられる。

さて、一般に、こうしたポートフォリオの作成は、学校教育段階だけではなく、それを超えて、生涯学習社会の到来が言われる今日、その人の生涯にわたる専門分野での学びや成長についての記録を収集し、保管することによって目に見える形で「その人の履歴」を

創り出し、自らの成長をふり返って (reflection) いくための方法として有効に働くと考えられている。

こうしたことは、「教師」という職業についてもポートフォリオの作成や活用の意義や有効性について同様のことが言えよう。今日、個々の教師にとっても「専門職」として不断の成長が期待されていることから、適切な資料として活用できよう。

ところで、ポートフォリオの先進国であるアメリカでは、小・中学校段階だけの子どもの学びだけではなく、現職教師の力量形成のための「学びの場」である教職大学院においても、「専門職ポートフォリオ」が広く作成されている。大学院の修了時にポートフォリオを作成し、その評価を実施して卒業するシステムになっている大学院が多い。

ここで取り上げる米国の教職大学院でも、1人ひとりの教師の成長を見とる評価として、ポートフォリオ評価は有効な方法として、採用されている。

そこで、本論文では、MSU (Michigan State University・ミシガン州立大学)の主として現職教師を対象にした「教職大学院」のMACT (The Master of Arts in Curriculum and Teaching)のコースでのポートフォリオ評価を具体的なケースとして取り上げて検討を試みることにした。

その検討のねらいは、専門職ポートフォリオがどのような目的で作成されているか、そして、ポートフォリオが「専門職」として、教師を育てていくのにどのように役立っているか、しかも、その場合、教師はどのように教職大学院で教職プログラム(カリキュラム)を履修しながら、ポートフォリオを作成していくのか等について分析・検討していくことにする。

さらに、その時の評価基準はどのようなものかにつ

いても明らかにしていく予定である。

ちなみに、ここで、MSUを取り上げた理由は教職大学院として、各分野（初等教育や中等教育等）について、全米で1-2位の高い格付け評価を得ている大学院であるからである。

こうした理由からも、MSUは1つの典型例として、分析、紹介するのにふさわしいと考え取り上げた<sup>1)</sup>。

## 2. MSUの教職大学院の目的とカリキュラム

さて、MSUでの「専門職ポートフォリオ」を分析するにあたって、まず、今回検討しようとするミシガン州立大学の教職大学院の目指す専門職教育の目的やねらいやまた、それに関わるプログラム（カリキュラム）について見ておこう。

というのも、当然のことながら教育評価は、教育目的のどのかかわりにおいて基本的に吟味されるべきものであるからである。

その場合、とりわけ、MACT (Master of Arts in Curriculum and Teaching「カリキュラムと教授法の修士課程コース」)を取り上げて考察することにする。

さて、MACTの大半の学生は現職教師である。アメリカでは修士号を持つ教師は多いといわれるが、アメリカの場合、学士の大学卒の教師と修士号を取った教師とでは、給与体系が異なり、経験年数が同じでも、給与は異なる。

こうしたことも現職教師の大学院教育志向へのインセンティブとして大きく働くと考え<sup>2)</sup>。

さて、MSUの教職大学院のMACTのカリキュラムの目的やその特色はどういうものであろうか。

そのMACTの目的は、大きく3つある。

- ①教師の専門職の力量向上
- ②大学院生による学びの共同体づくり
- ③主テーマを中心にする螺旋型カリキュラム
- ④個人の実践の文脈に即した学び

### 2-1 専門的力量的向上への探究

MACTコースは、「上級専門職の専門家」(advanced professional expertise)としての力を開発し、「専門性と個人の成長をめざす」ことを目的としている現職教師を主とした対象とした大学院のコースである。

ここでは、彼らが、教育実践の場においてリーダーシップを発揮する (potential change agents) ことができるようになることを目指している。

そこでのリーダーシップは、自分の受け持つ学級や授業を超えて、勤務先の学校で専門職集団の有能なメンバーとして活動し、専門職や実践者として、教育改善のために重要な役割と責任を果たすことができるようになることを意図している。

そのために、第一には、日々の実践で遭遇する問題

について、学問との関連で知的探究を行うことが主要な課題になっている。教職大学院は、これまでのような修士論文を書くために量的調査を行ったり文献を精読するというコースではない。

教職大学院では、アカデミックな探究そのものが自己目的ではなく、自らの現場で抱えている問題や自らの実践について知的に探究すべき問題を見つけて、解決していくことができるようになることが意図されて、カリキュラムは準備されているという特色がある。

このことはアカデミックな学問や知的探究を軽視しているのでは決してない。むしろ、アカデミックな学問や科学的探究を、教育実践の創造や問題解決にどう生かしていくのか、を主眼としていることに特色があり、中心や焦点の置き所が異なるのである。

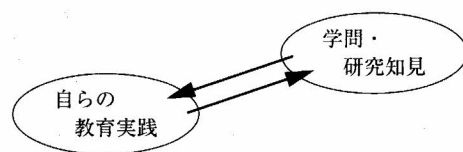
「学問のための学問の探究」ではなく、あくまでも、自分の実践の文脈に沿った問題解決や実践創造のために学問をどのように応用するのかということに、力点を置いている。

そうしたことから、「大学院のカリキュラムの特徴」としては、「座学中心」でなく、「活動的な学習」(active learning)と「実践に基礎をおいた探究的な活動」(field-based enquiry)が求められている。

学びの基本が自己の教育実践の改善であって、あくまでも、学問や研究はそれを方向付け、解明するためのものであり、そのことは現職教師にとって、当然のことと考えられる。

ここでは、学問や研究と教育実践との結合が目指されているが、その関係を図に示してみると下記のようになる。

図1 教育実践と学問との関係



第二には、こうしたことから、大学院でのカリキュラムの特徴は、学校実践や授業という複雑な文脈での自らの学びと経験をふり返りながら自己の教育についての考え方と実践力を育て構成していくことができるように、「螺旋型カリキュラム」(spiral curriculum)になっている。(この螺旋型カリキュラムについては、詳しく後述する)

と同時に、大学院在学期間中には、常に専門性を高めていくように、自己の探究を助け、自己の成長についての「諸々の諸資料」を蓄積していくことができるように、自己の学びの足跡を「専門職ポートフォリオ」(professional portfolio)として作成して残し

ていくように義務づけられている。

しかも、こうしたポートフォリオづくりが大学院修了時の要件として課せられ、大学院で各学生が自らの学びを構成していく時の軸になっていることが察せられる。

### 2-2 学びの共同体づくり (コーホート) >

次に、大きな特色としては、大学生活で学生同士の「学びの共同体づくり」(learning community)が意図的計画的に位置付けられている点である。

MACTでは、春・夏の入学にした大学院生達が1つの集団(cohort)となって、大学院の授業について単に情報交換というだけではなく、お互いに仲間と共に経験と考えを共有しながら、授業の聴講や準備レポートづくりについて互いに学び合う集団として、刺激し合い交流しながら全員で共に学んでいくことができるようになる「共同体づくり」を奨励するシステムづくりを目指している。

こうしたことから「学びの共同体づくり」を重視しているのである。

これは、「コーホート」という表現にもみられるように、1つのまとまりのある集団として動いていくことが意図され、かつ期待されており、それが学生同士の学びを向上させる「隠れたカリキュラム」として有効に働いていくと察せられる。

### 2-3 螺旋型カリキュラムの構造と垂直的なテーマ

次に、MACTカリキュラムの特徴としては、先に述べた「専門職」としての探究を目指した「螺旋型カリキュラム」になっている。

螺旋型カリキュラムの特徴は、次のようなものである。

まず、一人ひとりの学生には、大学院の過程を通して、広げ深めていくための「統合化されたテーマ」をもつことが求められている。

それは、各学生にとって、学年を超えた在学期間中の垂直的なテーマとなる。

こうした学生のもつテーマ(コースワーク)の例としては、下記のようなものがあげられる。

①「教師と教授」、②「学習者と学び」、③「文脈と共同体」、④「訓練された探究」(カリキュラム研究、教材の探索、自らの関心あることを追究する時にとられる多様な視点や研究方法について)等があげられる。

上記の4つのテーマの一つを選択し、学生は大学院の課程を通して、そのテーマを中心に探究することになる。そして、その他のテーマは、それを支えていく基本に位置づけられる。

次に、各学年での共通のテーマと主要な授業科目例は、以下に示す通りである。

#### 1年生 「個人的社会的文脈での学び」

中心科目——TE807 (専門性の発達と探究)

自らの考え教授や学びについて再検討を行い社会的歴史的な文脈で教育問題を考える

#### 2年生 「学級での教授と学習についての探究」

中心科目——TE808 (学級での授業における教授・学習)

教材コースやk-12生徒の学習や教授方略や教育評価

アカデミックな知識や社会的平等や公正

#### 3年生 「専門職文化、共同体、改革・改善」

中心科目——TE870 (学校におけるカリキュラム

デザインと開発・ポートフォリオづくりの指導)

TE872 (教師の教育者としての教師)

こうした授業科目(TE)は下表のそれぞれのねらいのもとに、4群に分類されている。<sup>3)</sup>

ブロック#1	専門職としての成長と学校文化 3つの授業科目の必修
ブロック#2	カリキュラムとスクーリング 1つの必修と1つの選択
ブロック#3	教科・教材とテーマ(内容) 3つの授業科目の選択
ブロック#4	選択科目 2つの授業科目の選択

さらに、付け加えるのならば、大学院での一つの授業科目の履修は3単位である。しかも、それぞれの科目について濃密な準備や予習に多大の時間が要求されている。

例えば、半期の1つの授業科目では、ミニレポート五つ、最終レポート10枚、授業中での発表・プレゼン等。従って、現場で勤務しながら大学院に通う現職教師達は、通常、1セメスターに2-3の科目をとるのが精一杯であると言われる。

こうしたことから、たいていの現職学生は3年間で終了するものの、予習・復習のために多くの時間が必要で、現職でありながら、大学院で学び続けることは相当にハードであって、最大限5年間の在籍期間が準備されている。

### 2-4 個人の学びの文脈を重視した履修を

次に、教職大学院での院生の学びの特色は、「自らの文脈(personal and social context)」での学びに基づいて学ぶということにある。

現職教師のその学びの特徴は、「自らの文脈で学ぶ」ということから、一般的にアカデミックな学習をす

るということではなくて、自らの携わっている実践や関心を掘り下げ、そこでの問題点や課題を的確にとらえ、知的に探究し解決を図っていこうとする研究態度が求められているのである。

こうしたことから、1年生のカリキュラムでは、各院生が、TE807「学習者と学び-文脈と共同体」の授業科目を中心に、学びや認識について自分の実践や経験を掘り下げていくことが求められている。

例えば、そこでは「教育に関わる研究者や利害関係者がどのように学びを定義しているか」、「知るとは何を意味しているのか」、「どのような知識が、誰にとって、どのような結果をもたらす価値があるのか」等について考え、これらのテーマが教育や実践にどうかかわるのか、自らの実践や経験と照らし合わせながら探究することが要請されている。

こうした自らの教育実践やそれに基づく学びの文脈に寄りそって学んでいくという態度は、成人の職業人としての学びに共通のもので、その本質に関わるものと言えよう。

上記の点を踏まえて、教職大学院の修了要件としては、下記①②③の通りである。

- ①各ブロックからの30単位の授業科目（大学院の学生は、合計30単位（1授業科目は3単位で、10科目・30単位履修）することが義務づけられている）
- ②修了のための専門職ポートフォリオの作成
- ③総括論文（synthesis paper）A4版で10枚程度

### 3. 専門職ポートフォリオの内容 (contents)

それでは、次に履修および、修了の要件となる「専門職ポートフォリオ」について詳述しよう。

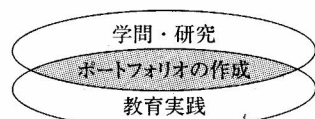
#### 3-1 ポートフォリオ作成の目的

Martin-Kniep's (1999) によると「ポートフォリオ作成のための枠組み」は以下の通りである。

専門職ポートフォリオは、大学の学問的なプログラムの中で作られるものではなくて、k-12（幼稚園から高等学校レベル）での学校や職場での教師や教育行政官としての勤務や仕事に基礎を置いた専門的成長に基づいて作られる必要があるとされている。

このように、ポートフォリオは、勤務している学校とMACTプログラム履修中の学生という2重の文脈の過程を反映し形成されまとめていくということが求められている。

図2 学生の学びと実践をつなぐポートフォリオ



<ポートフォリオによるまとめ>

また、ポートフォリオは次のような方向性をもつことが求められている。

#### ①自己の実践や学びを組織化していく役割

専門職として様々な役割（学び手、評価者、カリキュラム開発者、アクション・リサーチャー、専門職開発者、協同的チームリーダー）をもち、果たす。

#### ②物語風に構成していく手法でまとめる

具体的な固有の物語を中心にまとめていく。自分が主人公で、学校という状況で、中心となる出来事をテーマに、ストーリーをもって展開される出来事を柱にしてまとめる。

#### ③自己の時間的な比較法を用いてまとめる

自己の実践を過去、現在、未来の時間的流れの中に、位置づけていく。

#### ④専門職としてのゴールを意識してまとめる

ポートフォリオ作成において、いつも自己の「ゴール・目標」を意識しながらまとめていく。例えば、「自分のゴールは何か」、「私らしいゴールとは」、「私が目指して働くゴールとは」、「それぞれのゴールや分野での私の学びの成長の証拠となるものはなにか」、「自分はそれについてどのようなことを実際には成したのか」等。

以上、「自己の学びの組織化」「ストーリーをもって構成していく」「過去・現在・未来の時間的展望のもとに」「ゴールを自覚して学ぶ」等はポートフォリオ作成の方法の特徴を明確に示していると言える。

<自己の学びや実践を総合化する動き>

では、学生にとって、こうしたポートフォリオを作成していくことは、どのような視点を形成していくことにつながるのであろうか。

ポートフォリオを作成することは自らの実践や学びを総合化、構造化していくことに大いに役立つと考える。

この場合、総合化とは、「違った視点から、より広く深く自らの物語をとらえ直すことであり、単に時系列的にばらばらの出来事を並べることではない」。

総合化とは、自らの学びに新しい意味を見いだすことであって、隠されたことがらや問題に光りを当て、関連づけ、ばらばらのものをまとめ、調和のあり、未来の見てくるものへと再編していくことである。ポートフォリオを作成することによって、そのことが可能になり、と同時に、それが自己の成長にとっての永遠の「作品」になっていくと考えられている。

では、ポートフォリオの具体的な中味としてどのようなものを綴じて行けばよいのであろうか。

#### 3-2 専門職ポートフォリオの中味 (contents)

\* MACTポートフォリオになにを入れるか。

- ・大学院生の過程で専門職として成長したと思われるもの。
- ・自己のふり返り、自主的学び、自己認識、自己評価の関するもの。
- ・カリキュラムの選択のし方とあなたの成長について物語る資料。
- ・多様な目標に向かった成長と専門職としての成長がわかるもの。
- ・友達からの観察、評価、フィードバックに関するもの。
- ・大学側のガイダンスや検討やフィードバック。
- ・学びの転移や実践や方針上の意味ある変化の追究が見られるもの。
- ・思考、技能、関心、活動や態度の変化や成長等を示すもの。
- ・自分のベストの作品や到達を示すもの。
- ・総合論文 (synthesis paper)。

以上、ポートフォリオの中味には、各人の成長を促すもので、受講した授業についてのレポートだけではなく、終了時に作成する「総括論文」(synthesis papers)も含んでいくようにする。

なかなか、自己の変容や成長はとらえにくいものであるが、ポートフォリオを作成し、書かれたものを通して、みずからの学びや実践をとらえることによって自己の成長や変容をとらえることが可能になると考えられている。

なお、修了時作成の「総括論文」の要件については、下記のとおりである。

- ・MACTプログラムで学んだ最も重要な事柄についてのエッセイ。
- ・ストーリーがあり、自分自身の声で書かれている。
- ・教師、学習者、同僚、専門家としての経験が描かれている。
- ・プログラムを受ける過程でのつまづきや飛躍やスランプと負について、物語風、詩、メタファー、類似、ユーモアを使っているか。
- ・自分の見方や専門職としてのゴールや個人内化された理論や共同体について述べられている
- ・関連づけられてカリキュラム、教授法、学習について述べられている。
- ・タイプで10枚程。

以上、「総括論文」も一般の研究者が書く研究論文とは異なっていることが読み取れる。それは、一般的抽象的な展開ではなく、あくまでも、自己の経験や実践の文脈性にそっていくことが基本とされているのである。

これまでにも見てきたように、ポートフォリオが、自らの実践や学びの過程に寄りそって、自己の学びを

構成していくように作成されることが目指されていることがわかる。

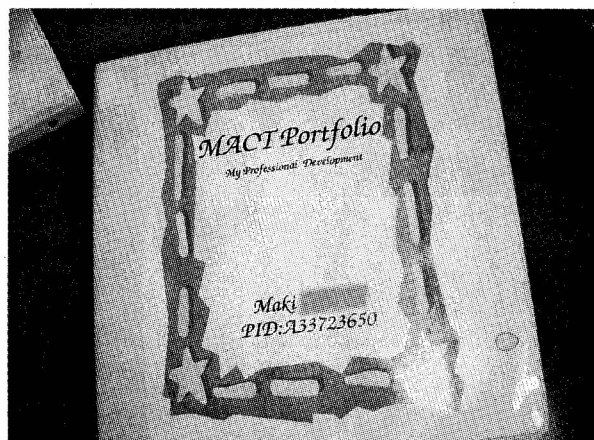
それで、次に具体的にA教諭の修了ポートフォリオを考察しよう。

#### 4. A教諭のポートフォリオのケース分析

では、A教諭の学んだMACTのコースの目的、そして、ポートフォリオのコンテンツ等について見ていこう。

##### 4-1 MACTコースの5つの目標

専門職ポートフォリオを作成していく時に、MACT (Master of Arts in Curriculum and Teaching) の大学院コースの学びの過程で、下記の1から5までのゴールを達成していくことが重視され、それとの関係で、ポートフォリオも選ばれ、作られていく必要がある。



<写真 1>

##### MACTの5つの目標

- ① 義務教育段階の子どもの学力を高めるための学問や教科、多様なカリキュラムや教授法や評価についての深い理解と造詣がある。(カリキュラム・教授・教育評価についての理解)
- ② 義務教育段階の子どもの意味ある教育経験を通じた価値ある知識に平等に関わり参加できるように、また学びにおける多様性の役割についての深い理解がある。(子ども理解)
- ③ 個性的発達やアカデミックな生涯学習、民主的な参加、子どもや教師のために社会的公正という目標を実現できるように学級や学校に、学びの共同体づくりや校内での多様性を活かした共同体づくりをめざし確立していくことのできる能力を持っている。(学級経営・校内研修体制)
- ④ 改革・改善を批判的に評価する知識、態度、技能 - 自己の哲学、専門的な考えに基づく異なった人々の関心を理解しながら、自らの教育的文脈における教授と学習(授業実践)の改善ができる。(自己の教育実践の改善能力)

- ⑤ 専門的な活動に積極的に参加し、学校改善のための努力をし、仲間の成長や学校内外を問わず、教育組織で方針を出していく時に、リーダーシップを発揮していくことができるように、主体的、持続的な専門家としての成長に励んでいくことのできる能力をもつ。(学校内外での学校改善のためのリーダーシップ)

上記のMACT(カリキュラムと教育方法)のコースの目標のもとに大学院生の履修がなされ、受講に従って、ポートフォリオが作成されていく。

では次に、ポートフォリオには、どのようなものが綴じられていっているのでしょうか。

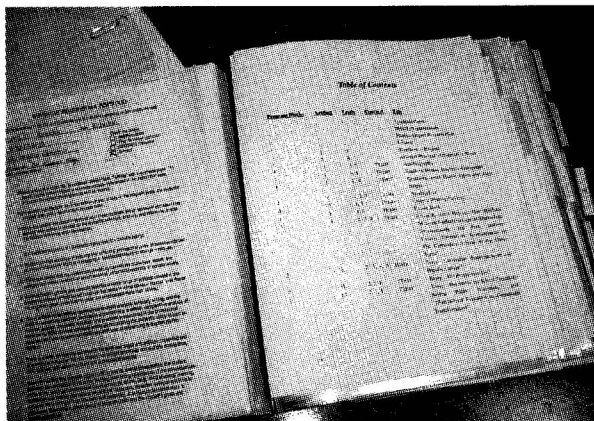
ポートフォリオの形式は以下のとおりである。

#### 4-2 ポートフォリオ作成の方法

<何を入れるか (contents) >

- ①はじめに (introduction, 作成にあたって)
- ②自己の履歴紹介 (高校から～)
- ③専門職としてのエッセイ
- ④MAポートフォリオの総括的評価  
4者(指導教官 自己評価 友達)
- ⑤目次  
「ブロック 授業科目名 目標 タイトル」  
A「選択した 授業ブロック #1-#4」  
B「自分の作品・レポート」  
C「目標」(MACTの5つの目標のどれに対応するか)  
D「コース・授業科目名 TE」  
E「タイトル」

A	B	C	D	E



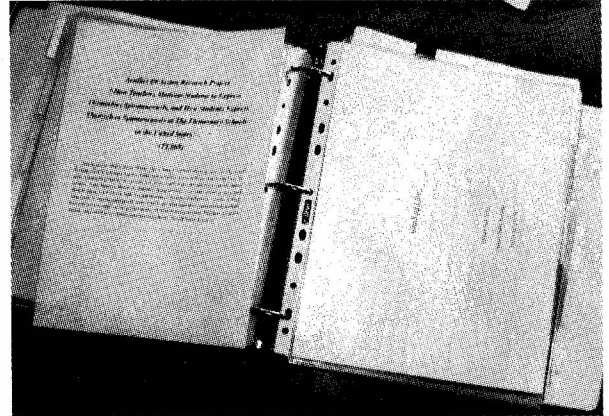
<写真 2>

- ⑤ 作成のための手引き書・ガイド  
A 自己の勤務している職場のもつ社会的文脈・

環境・種々の条件について記述すること

- B 学級の文脈・条件・状況について記述すること

A教諭は、修了ポートフォリオ作成のために、大学院での受講授業科目のレポートや課題や実践研究(action research)のまとめ等から、「自己の21の作品(artcraft)を選んでいく。」<sup>4)</sup>



<写真 3>

ここでの特徴的な印象に残った授業科目としては、下記のようなことがあげられる。

- ① ポートフォリオづくり (TE870) と1年間の日本語教材・単元づくり
- ② 実践研究 (action research) を行う (TE808)
- ③ 各ジャンルから「ブックリストづくり」を行い、書評を書く (TE849)

つまり、授業科目の中にポートフォリオを作成する授業や実践研究 (action research) を実施し、検討し進めていくための授業時間が位置づけられていることである。

また、「ブックリストづくり」の授業では毎週のように各ジャンルから数冊本を選んで、その内容紹介とコメントを行う時間が設けられており、それは学生の教育内容への広く深い視野を育て、教材解釈力を深めることにつながると考えられる。

#### 4-3 MACT修了時のポートフォリオの評の検討)

次にポートフォリオ評価について見ていこう。

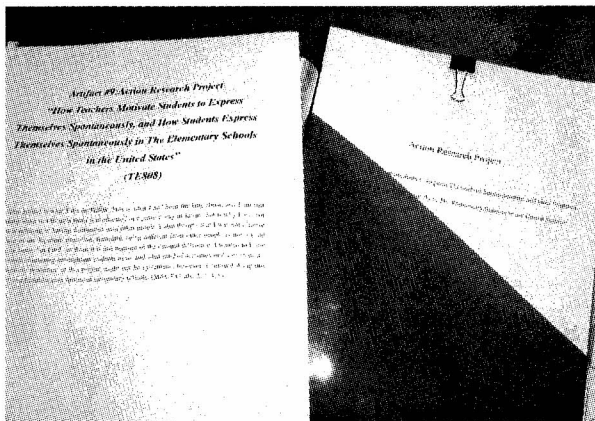
大学院修了時に作成されたポートフォリオは、まずは、複数の関係者によって評価されることである。それは、指導教官だけではなくて、本人の自己評価、そして、「学びの共同体」からの友人からの評価もなされているところである。

さらには、下記に示すような六つの「評価基準」が明確で公開・共有されており、これは、各学習者が、ポートフォリオを作成しようとする時の指標になると考える。

<複数の評価者による複眼的評価（4名）>

「自己評価」「友達からの評価」「TE870・872のポートフォリオ作成担当教官からの評価」「指導教官」の4者がそれぞれ評価シートに評価・評定を記述している。

この点では、注目すべきことは評価者に学習者本人が入っていることである。そして、大学院での履修の仲間である「学びの共同体」の友人からの評価も綴じられている。



<写真 4>

<ポートフォリオの評価基準・評価項目>

修了ポートフォリオを評価・評定する評価基準の項目は下記のとおりである。

まず、MSUのポートフォリオの総括的評価のシートは2種類あり、それは「全体の評定項目」に関するものと「作成されたポートフォリオの内容を評定する項目」とに分かれる。

これらの評価項目が、ポートフォリオの評価基準になっており、学習者がポートフォリオを作成する際の目安にもなると考えられる。

① 全体評定項目

- ・総括論文（A4・10頁）とコースを通じた作品（論文）が修士号ポートフォリオのファイル、またはホルダーに含まれているか。
- ・修士課程の目標、学生の計画表、選択したMAコースのリストが含まれているか。
- ・選んだ作品の日付、それがなにごとであるか、それが書かれた時の自分のリフレクションや分析やリファレンスが載せられており、同時に読み手を意識したリファレンスと解釈があるか。

② 各自のポートフォリオの評定項目

<優秀 (Excellent) 満足 (Satisfy) 不十分 (Unsatisfy)>の3段階で評価を行う

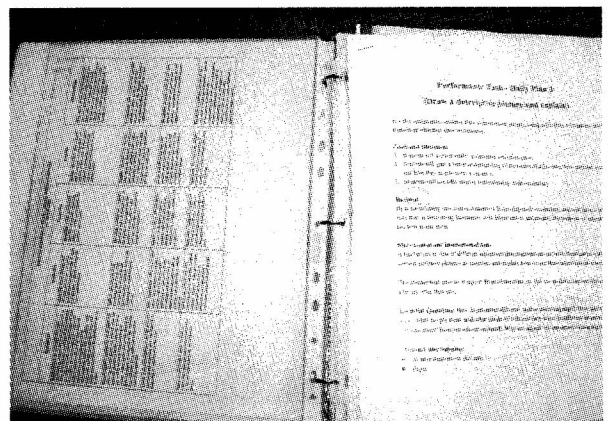
ESU

- 1 専門職としての目標の達成や自分の関心を高めるため、fieldbased 研究に

十分に従事してきたか

- 2 個人として、または協同的に、フィールド研究や実践研究 (action research) をデザインし、体系的に実行し、レポートをつくり、評価しているか
- 3 5つのコース目標に関連する分野から、入念によく作品を選んでいる
- 4 深い分析、学術的記述、まとまりがあり説得的な議論を構築できているか（専門的なコースの過程で理論や政策や提案や研究や実践について批判的、比較分析がなされているか）
- 5 MSUのコースでの専門的実践や学術的研究で、探究してきた証（証拠）が総括論文 (synthesis paper) や作品に明確に力強く出ているか
- 6 学びの過程を通しての全体的に系統的に表現され、実質的な内容が盛り込まれているか（義務教育での生徒の学習、学級を超えた協同的学び、子どもの学びを高めるための積極的な同僚との連携等）。ユニークで個性的な専門職としての内容になっているか

上記の評価基準表から、「実践に根ざした研究か」、「体系的デザインのあるレポートか」、「5つのゴールから選択されているか」、「学術的専門性がレポートに表現されているか」、「中味の濃いもので、その人らしさが表れているか」という項目（評価基準）によって、最終ポートフォリオが評定されている。こうした評価基準はポートフォリオ作成の方向性と深く関係するもので欠かせない。



<写真 5>

ポートフォリオ評価は、ただの「学習ファイルやフォルダー」の作成とは、下記の点が異なる。

- ①学習者の「学びの足跡」「成長」についての資料を

系統的に残す。

- ②自己の学び過程を組織化していく。(伴走者として)
- ③自らの学びの自己評価やふり返りに活かす。そのためには、ふり返りや総括的評価の客観的な指標である
- ④明確な評価基準が公開・共有されている。

こうした自らの学びのふり返りを行うことによって、学習者の「メタ認知」を育てていくことが可能になると考える。

しかも、個の学びを深めていくだけではなく、学びの「仲間とのコミュニケーションを深める」手段としても有効に働いていることが見てとれる。

以上、MSUでは教職大学院で専門職ポートフォリオの作成が、教育実践を変革し・改善していくための力量形成に深く関わっていることが明らかになった。

こうしたポートフォリオを作成することによって現職教師にとって自己の教育実践を考え直す良い機会になっていることがわかる。

先述したように、現職教師の学びや研究は、研究に従事しながらも、「研究のための研究」ではなく、自らの実践を広い学問的な視野で位置づけ直し、その造詣を深め、改善していくためのものであるということが特徴である。

つまり、学術的研究が研究者養成のための営みではなく、教育実践を豊かにしていくためにあり、活かされ、教師の一人ひとりの力量を上げていくために学ぶという点において一貫し、筋の通ったものになっていることである。

こうしたことから大学院修了時の専門職ポートフォリオは、各教師の専門性の向上と個人の成長を見とっていく評価」として、重要な役割を果たしていることがわかった。

MSUの教職大学院修了時の「専門職ポートフォリオ」では、今まで見てきた考察からも、ポートフォリオの本来の主旨が発揮されている。

## 5. 結びにかえて

21世紀に入り、社会の大きな変動の中で、我が国においては、教育にも大きな改革が期待されている。教育の改善や向上には、制度の問題もさることながら、教育を動かし、子どもの成長に直接に関わっていく一人ひとりの教師の意識改革と資質や力量形成は不可欠のもので、今日、ますます重要な課題になってきている。

これまでのように、教員も教員養成課程を終えて、すぐさま教壇に立ち、経験と幾ばくかの研修だけで、生涯にわたり教師を続けていくという時代ではもはやないであろう。

生涯にわたって現職教師一人ひとりが、専門職とし

ての力量の向上や資質形成に励んで成長し続けていくことは避けて通れない課題である。

今後、こうした意味でも教師達が自らの教育実践について不断に研究を深め、実践を検討していく力量を高めていく場が求められており、そのことは一層ますます重要性を帯びてくるようになると思われる。

我が国でも、同じような背景のもとに教師教育のための「専門職大学院の創設」が焦眉の課題となっている。

基本的には、専門職大学院は現職教師の力量向上のための再教育の場としての必要性から生まれた学びの場である。

これまで、教育改革の度に、教師の意識改革の必要性や力量向上が常に言われてきたが、しかし、それはどのようなシステムや方法によって可能になるのかについては、あまり言及されてこなかった。

それは「上意下達式の研修」によるのではなく、その契機となるのは、教師自身の「教育実践のふり返り」の中から見えてくるものが大きいと考える。

「専門性」を高める制度の創設は大きな意味を持つと共に、その中味や方法の充実は避けて通れない課題である。

こうした点からも、ポートフォリオづくりは1つの有効な方法として欠かせないものであろう。

それは、教師一人ひとりの意識改革を促し、力量形成を高めようとする態度を醸成する働きをする。

これまで、考えてきたように、あらゆる教育改革に欠かせない教育実践にかかわる教師自身の意識改革も、ポートフォリオの作成による客観的な資料により自らの学びをふり返り、自分の実践の位置や実際を冷静にとらえて知ることによって行われるべきものであろう。その際に、ポートフォリオは有効に働くと考える。

米国では、現職教師の生涯にわたる教師としての成長と専門的力量を見とり、また自らをふり返る時の有力な方法として、ポートフォリオづくりが実践され、ポートフォリオ評価が行われている。

ポートフォリオには、一定の形式や評価基準は欠かせないが、ねらいと成長の段階に応じて具体的なものは、各大学や現場で、固有の目的や実情に照らし合わせて作成されていくことが望ましい。

本論文では、米国のMSUのポートフォリオを取り上げ検討してきたが、これはあくまでも、1つの参考例にすぎないものではあるが、各大学院での実践化にあたって、多くのことを示唆を与えてくれていると考え取り上げた次第である。

## 注 釈

- 1) 2005年度のMSUの全米の「教職大学院プログラム」の順位づけは、以下の通りである。



初等教育部門 1位 中等教育部門 1位  
カウンセリング部門 1位 カリキュラムと授業部門 2位  
教育心理学部門 3位 教育政策学部 9位  
<http://ed-web3.educ.msu.edu/mact/over.htm>

- 2) とりわけ、ミシガン州、州都であるランシングにおいて、「学士BA」「大学院MA」「MA+15単」「MA+30単位」「MA+45単位」とそれぞれに応じて給与体系が異なっている。
- 3) 「TE000」とは、大学院で準備されている授業の科目番号のことで、MACTコースだけで、TE800からTE899の約100近い授業科目が開設されている。さらに、こうした各授業科目(TE)はブロック#1-#4の4群に分類されている。
- 4) 選択された授業科目は下記のとおりである。  
ブロック#1 TE807 TE808 TE870 TE87  
#2 TE800 TE818  
#3 TE845 TE847 TE849  
#4 TE855 TE890

下線のある授業科目は、A教諭が、専門職ポートフォリオを作成するに当たってに選択して、ファイル化した授業科

目についてのレポートやエッセイ等。授業科目内容の具体的なものは、下記のアドレスを参照してくださいと幸いです。

<http://ed-web3.educ.msu.edu/mactcsdesc.htm>

## 追記

本論文は、現在、Forest Hills Central High Schoolの教諭であって、2003年にMSUのMACTコースの教職大学院を修了した小坂牧さんの「専門職ポートフォリオ」の内容の分析と彼女へのインタビューと提供された諸資料によるところが大きい。

末尾になりましたが、彼女の協力への謝意をここに表します。

なお、本研究は、文部科学省科学研究費(基盤研究C-2)寺西和子代表「ポートフォリオ評価の実証的研究 その2」(平成15-17年度)のもとに、調査しまとめたものであることをここに記しておく。

(2005年9月14日 受理)